第Ⅶ群　座長のまとめ

東邦大大橋病院　　耳鼻咽喉科
臼　井　信　郎

第Ⅶ群は内容を異にする3題から成り立っていた。椿氏の発表はスギ花粉症に対するフルニソリド点鼻液の予防投与により，スギ花粉飛散期に出現する症状を抑制することができるかどうかについて検討したものである。スギ花粉症に対する薬剤の予防効果の検討は，内服薬においてはなされているが，鼻用ステロイドスプレー剤については行われていなかった。その理由は鼻用ステロイドスプレー剤の症状抑制効果の発現は早く，3～7日以内に良い効果が得られると考えられているためと思われる。対象はスギ花粉飛散前にフルニソリドを投与した予防群と，スギ花粉飛散後鼻症状が出現してから来院した対照群とで検討された。その結果，1日2回の噴霧を2～3週間継続することによって予防効果が得られ，かなりの症例が無症状あるいは軽症で経過すると結論された。最近は花粉の飛散開始日や飛散量などについて，かなり正確な予測ができるようになったので，副作用は認められないにしても，予防投与期間をもっと短くすることができるのではないだろうか。原田氏は慢性副鼻腔炎3例に長期間ブロンカスマ・ベルナを週2回，エアロゾル法にて投与し，有効性と安全性について検討した。その結果，レントゲン的には改善は認められなかったが，投与10週目頃から自・他覚所見に改善がみられ，副作用もないことから有効な治療法であると述べた。従来，ブロンカスマ・ベルナは皮下注射によりアレルギー性鼻炎や慢性副鼻腔炎の治療に用いられてきたが，ネビュライザー療法でも有効であることがわかったわけである。今後は鼻茸に対する効果などについても検討をお願いしたいものである。大越氏は薬剤内蔵式の大型ジェット式ネビュライザーにおけるトブラシン，リンデロン，インタールの薬剤濃度の経時的変化について報告した。この大型ネビュライザーは，1回毎に薬液を注入して使う従来方式のものと異なり，大型のタンクにあらかじめ薬液を貯蔵しておき，それを次々に患者に噴霧する方式の装置ということであり，薬剤濃度の上昇や配合による薬剤の変化等による鼻粘膜への悪影響のないことをあらかじめ検討しておく必要があるということで行なわれたものと思われる。結果は，トブラシンとインタールを混合すると白濁し粘稠な沈殿物が出来，濃度の上昇も認められたということであった。